



支える下

「普段の食事は？」「東京で練習し、つくばに帰るのが23時。そこから自炊は正直きつい」。筑波技術大4年で東京デフリンピックのハンドボールに出場する林遼哉選手(21)に手話でインタビューしていた。共に学内の寄宿舎で暮らす先輩の本音を引き出す。「親しい選手なので、日本代表に選ばれたらぜひ取材したかった」

視覚障害者を含めると全学で25人ほどの学生記者とともに、学内のWEBマガジンに記事を掲載する。今大会テコンドーに出場する星野萌選手(21)は「記者仲間」で、韓国研修での経験を記事にした。大学院で日本建築の特徴を収納面に焦点を当てて研究している。その一方で、東京・日本橋での子供向け催しでは、建築の楽しさを紹介する企画に参加した学生に取材。ろう者が暮らしやすい空間デ

学生記者

川上慶悟さん(24)

サインを研究する学生にも話を聞いた。

今大会を機に「仲のいい選

選手の本音を発信



デフハンドボールの林遼哉選手宅に手話でインタビューする川上さん＝8月、つくば市の筑波技術大で

手は他にもいて、こんなことを聞けるんじゃないかと考えながら取材しています。まだ原稿になっていないネタもあり「早く書かないと」と苦笑い。

へ。小学校は2年まで出身地・奈良市内のろう学校。小学3年から高校卒業までは聴者と同じ学校に通った。高校では口話で英語ディベート部に入部。「おしゃべりや他の人の考え、意見を知らるのが好きで、でも聞き取れず、大変でした」「新型コロナウィルス禍がなかったら、他の大学に行っていたと思う」という。情報を全学生に確実に伝える「情報保障」の手段を、他大学に進んだ友人から「コロナ禍でキャンパスに行けず、タブレット頼み」と聞いた。「それじゃ、ちゃんと学べないのでは？」と怖くなった。

学部を卒業した今年3月、大学の良さを記した長文を交流サイト(SNS)に投稿した。それを読んだ大学の広報担当者が、オープンキャンパスの情報をSNSで発信してはどうかと提案。学生記者となり、企画の提案から手がける。

指導する大学広報室長の若月大輔教授は「学生の主体的な活動や活躍を発信するため、学生記者を本年度から導入した。大会では選手への取材を通して熱気や感動を伝え、学生記者の核となって活動を発展させてほしい」と期待する。

川上さんは大会でサポートスタッフを務め、東京・代々木のデフリンピックスクエアで海外選手らに日本文化をPRする予定。「盛り上がり学生をの視点で取材し、聴覚障害を巡る社会にどんな意義がある大会なのかを伝えたい」と開幕を楽しみにしている。

大会運営本部や選手の交流、報道センター、練習会場など大会運営の拠点。15～26日午前9時～午後8時、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターに開設する。デフスポーツやろう者の文化への理解を深め、新技術を体験する企画を用意。選手関係者エリアを除き、入場無料で公開する。

筑波技術大のWEBに記事